

木曾川

木曾川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
今回は古代より開けた池田町から、
その歴史や杭瀬川の改修を中心に紹介します。
歴史ドキュメントでは、
長良川・揖斐川の流路の変遷を特集します。



岐阜県池田町

ふるさとの街・探訪記

西濃の要衝の地として
発展した池田町。

エリア・レポート

池田町の水環境と杭瀬川上流改修

気ままにJOURNEY

天空へ駆け上がる、
祭囃子の音色。

歴史ドキュメント

長良川・揖斐川の河道変化と郡境

TALK&TALK

『水屋・水塚・段藏 日本各地の防水建築』

民話の小箱

白竜退治





西濃の要衝の地として

発展した池田町。

池田山に抱かれた池田町は、古くから歴史が開けた町。土岐が滅ばば足利も滅ぶといわれた土岐氏は、この地を重要視して本郷城を築城。揖斐川や粕川に恵まれているものの、用水や水害の問題も深刻で、番水や鎌留という制度も設けられました。昭和三年には現在の池田町が誕生。健康文化都市を目指して、多彩なプロジェクトが推進されています。

池田山麓に開けた町

池田町は、岐阜県の南西部、揖斐郡の最南端に位置しています。西には標高九二四mの池田山がそびえ、その南に低く隣接して横たわっているのが金生山です。町の中央を流れる杭瀬川は池田山の多くの渓流を集め、池田山麓



美しいび茶を栽培する茶園

に沿って南流しています。また、町の北東部を揖斐川が、北部を揖斐川の支流の粕川が流れています。

池田山麓では、県下でも有数の良質茶、美濃いび茶が生産され、平坦地では名高い池田米をはじめ、イチゴ・タマネギなどの栽培も盛んです。明治時代までは農業が主産業でしたが、昭和三〇年代以降、工場誘致が進められ、機械工業、石油化学工業などの重工業が比重を高めつつあります。



進出企業続々

古墳が語る古代の池田町

池田町域には、池田山山麓に大小無数の古墳が群集しています。



段原遺跡出土の縄文土器

築造期は、五世紀から七世紀に及ぶといわれていますが、山麓地帯の出土品の中には、約一万〜一万二千年前の有舌尖頭器があります。縄文時代の遺跡は、段原遺跡、舟子遺跡など多数あり、多くは狩猟や採集に適した池田山麓に分布します。弥生時代には、高畑遺跡・深谷遺跡などが平野部を中心に展開しています。古墳時代中期の五世紀後半には古墳が数多く造成されるようになり、白山古墳群は、この頃から築造が開始された群集墳と推察されています。

壬申の乱と湯沐邑

古代最大の内乱である壬申の乱（七二一年）は、大友皇子（天智天皇の息子）と大海人皇子（天智天皇の弟、後の天武天皇）の間に起こった皇位継承争いでした。乱に勝利した大海人皇子側の重要な戦力となった地域は、安八郡湯沐邑です。ここは皇子の直轄領的な性格を持ち、現在の安八郡や大垣市の大部分、揖斐郡の一部を含む範囲で、肥



沃な農業地帯であったと推察されます。中でも池田町がその中心でした。乱の勃発に際し、湯沐邑の人々の活躍でいち早く不破道（現在の関ヶ原町）を押さえたことが勝利を呼びました。池田町には条里制の遺構も多数残されており、条里制の施行を契機に、地域開発が進んだと考えられています。

泉江荘と池田荘

承和四年（八三七）、安八郡から分離して設置されたのが池田郡です。池田郡は額田・壬生・伊福・春日・池田・小



池田町空撮

ふるさとの街・探訪記



島の六つの郷からなり、現在の池田町域は、額田・壬生・池田・伊福郷におよそ相当します。

律令制の崩壊とともに、荘園が台頭します。池田町には、泉江荘と池田荘があり、ともに著名な神社を領主と仰いでいました。

泉江荘は、石清水八幡宮を本所としていましたが、寛仁四年（一〇二〇）春頃から、疱瘡が流行して飢饉となり、荘司をはじめ住人がことごとく死亡し、荘園は荒廃しました。その荒廃田は、太政官の命を受けた美濃国の指揮によって再開発され、開発田五〇余町歩は、荘園から国御領に復帰しました。池田荘は、後白河法皇が勅願で新熊



野神社を勧請した領地にあり、一一世紀以降は、代々池田郡司であった紀氏が荘官を務めていたようです。紀氏はもともと平安貴族でしたが、池田郡領主の娘と結婚してこの地の荘官となり、平安末期に池田荘を支配したと推察されます。

中世の土岐一族

室町時代から美濃国の守護を務めた土岐氏は、美濃平野を確保し、都との往来を掌中に収めるため、特に池田山を重要視していたようです。足利將軍家が発願し、国毎に設けた安国寺は、美濃国では土岐氏の尽力によって池田の小寺に建立されました。

土岐一族の三代目守護の頼康は弟の頼忠を池田に配しています。頼康死後、その子の康行は將軍足利義満に疎まれ、討たれました。康行追討の命を受け、康行没落後、美濃国守護を拜命したのは、池田に住む土岐（池田）頼忠。池田を勢力圏として本郷に城を築いた



土岐頼忠並びに一族之墓

よつです。この城の発掘調査によると、平安時代の土器も出土しており、土岐氏以前の紀氏の時代から人々の活動があったと推測できます。

応仁の乱と土豪国枝氏

応仁の乱で西軍に力した土岐氏は骨肉相食む同族争いもあいつつ、その勢力は衰退し、各地の土豪が台頭しました。この一帯では、国枝氏の太郎ヶ城・本郷城、稲葉氏の小寺城、不破氏の片山城が知られ、支配の拠点だったようです。

土岐氏に代わって池田地域で勢力を伸ばしたのが、有力豪族であった国枝氏でした。以後、国枝氏は太郎ヶ城（大和）の築城、龍徳寺の再興、本郷城の改修及び城下整備、市場開設の奨励等地域の発展に寄与してきました。しかし関ヶ原の戦いで西軍について敗戦、城・城下町ともに焼き払われました。主な領主を失った池田地域は、江戸時代に大垣藩・尾張藩・備前岡山藩・天領や旗本領に分割され、明治を迎えることになりました。

戦国時代に信長、秀吉に仕え名を馳せた池田恒興は、長久



本郷龍徳寺にまつられる国枝為助一族の墓

手合戦で長男の元助と共に戦死し、先祖ゆかりの池田町本郷に葬られました。

恒興の次男輝政は、のちに姫路城主となり、恒興の子孫たちは、備前岡山、因幡鳥取などを領する大名として繁栄しました。

池田井水と争論

近世の池田町はその灌漑用水を中央部の本郷・田畑などの一四方村池田地区（は粕川に水源を求め、対岸の小島地区・揖斐川町）と二分して取水していました。一方、東部の上田・東野などの七カ村は、揖斐川に求め、脛永（揖斐川町）で取水しており、ともに池田井水と呼んでいました。

中でも粕川から取水する池田井水は、粕川の水量に反して用水に依拠する集落が多いため、通常時でさえ水不足が起き、干天が続くと渇水になるなど、水不足は深刻でした。

元和四年（一六一八）、粕川取水の堰工事をめぐって、小島地区と池田地区との争論が起こり、当時美濃代官であった岡田善同の調停によって、両井水は等分の取水することが決定しまし



池田恒興・元助父子の墓

た。寛永一八年（一六四一）、池田・小島両井水とも、干天時をめぐる番水規定が設けられました。これは渇水期、用水内上下村地域への公平な水量配分を目的とするもので、石高に応じて配水時間を決め、分水されることになりました。

しかし、漏水などの問題もあり規定通りの配水はできず、井組間、井組内の争論は絶えませんでした。

江戸中期に実施された粕ヶ原野・池田野両新田の開発も、用水難問題をさらに深刻化させました。周囲の強い反対を押し切って開発された両新田は、幕府直轄領でしたが、周辺の大垣藩領との争いを避けるために大垣藩預かりとなりました。

池田町域東部の六之井でも新田開発は進められましたが、用水取得の問題などから断念し、代って畑地で茶栽培が始められ、六之井茶として商品化されました。

池田山の鎌留

林野は、刈敷肥料や林の採草地、燃料の柴・薪や普請材の供給源として、あるいは用水源として、農民の生産生活に不可欠のものでした。元文元年

（一七三六）粕ヶ原が新田開発されるのに反対して、江戸幕府の評定所へ訴えた農民の訴願書に、「新田開発のために野を取り上げられるのなら、農民は滅亡します」と書かれています。

これは林野に対する農民の気持ちを如実に伝えるものでしょう。

池田町域では池田山や粕川原野に野山割年貢定め制定が設けられており、農民の林野利用を認めることも、年貢を徴収していたようです。

しかし、江戸中期の池田山は、樹木柴、下草にいたるまで乱伐されて、丸裸に近い状態で、雨が降れば滝のように谷を流れ下っていたようです。

このため、川普請や砂防の工事も行われていましたが、それだけでは洪水を防ぐことはできません。文政一〇年（一八二七）には、地域の人々が連署連判して、鎌留を制度化しました。鎌留とは、山の木や草を一切伐らないということ。山番人を置き、見張らせただけでした。立木はもとより、草木を刈り取った者は、罰金一両。掟を破った者は、「所払い」となりました。鎌留をした地区は、池田山南部の片山です。

当時、山稼ぎを生業としていた人々にとって、鎌留は死活問題だったのです。しかし、毎年のように起こる山崩れ、土砂の押し出し、出水の惨禍から川を守り、水を治めるために、住民自らが厳しい治山の掟を制定し、守ったのでした。

市橋港と杭瀬川舟運

明治一九年（一八九六）、池田郡と大野郡の一部をもって揖斐郡となり、明治三〇年郡制実施に伴い、県下全域に

町村合併が進められ、池田町域には、「本郷村」「養墓村」「宮地村」「池田村」「八幡村」の五つの新しい村が誕生しました。

これに先立つ明治二五年頃、安八郡北一色村（現神戸町）の大場倉蔵が、八幡村より下流の杭瀬川の豊富な水量に着眼して、市橋港を開設しました。八幡・市橋・赤坂を経て、大垣西方を迂回して揖斐川に合流する杭瀬川は、江戸時代より水路による貨物輸送の重要な役割を果たしたからです。明治三〇年には、市橋港の一層の充実を図り、最盛期には二六〇余隻の共船組合も組織されました。積荷は地元特産の石灰を中心に、木炭、柿渋のほか様々でした。

市橋港は地元や郡内の生産物資の集散地として揖斐郡の発展の一翼を担いましたが、大正八年（一九一九）美濃赤坂線、昭和三年（一九二八）市橋線が開設されると、石灰などの運搬は鉄道に移行しました。加えて、杭瀬川改修の影響で船の航行が困難となり、昭和一三年、市橋港はその歴史に幕を降りました。



市橋港跡

健康文化都市を目指して

昭和二五年池田村に安八郡北平野

村白鳥が編入、池田村は本郷村と合併して温知村となります。昭和二九年同村は町制が施行され池田町となり、昭和三〇年八幡村・



合併祝賀パレードをする揖南中学校の生徒たち

宮地村と合併しました。昭和三二年養基村の一部を編入、大字市橋の一部が不破郡赤坂町（現大垣市）に編入され、現在の池田町域となりました。新しい町の建設を目指して、土地改良事業や杭瀬川の改修、道路整備、ほ場整備事業、池田山と池田山麓の開発などが行われました。

昭和四八年には、池田町総合計画を策定し、豊かな人間環境を保障する文化田園都市の建設を目標に、文化施設や社会福祉施設などの建設を積極的に推進しました。

平成一七年には町制五〇周年を迎え、国際理解教育推進事業をはじめ、新しい時代の教育を積極的に進めています。

参考文献

- 『池田町史』 通史編 昭和五三年 池田町
- 『池田町五十年のあゆみ』
- 平成一七年 池田町
- 『ふるさとやわたの川と道』
- 平成二二年 池田町八幡公民館
- 『ふるさと 養基』
- 平成一四年 池田町養基公民館
- 『角川地名大辞典 岐阜県』 角川書店

AREA REPORT

岐阜県池田町

池田町の水環境と

杭瀬川上流改修

扇状地に立地する池田町は古くから稲作が盛んでしたが、多くの水田が水不足に悩まされてきました。一方、町の南部一帯は、杭瀬川とその支流の氾濫や過剰な湧水に苦しんできました。天井川となっていた杭瀬川の改修は、人々の長年の悲願でした。

水不足が深刻だった
扇状地の中央部



杭瀬川(市橋)

揖斐川や粕川の扇状地にある池田町の平野部は、古代より開発が進み、西濃地方でもっとも一反あたりの収穫が高い水田地帯でした。とはいえ、その水事情は、扇状地の中央部と扇端部では大きく異なっていました。

かつての池田村、本郷村などが位置する扇状地の中央部は、水はけの良い砂礫層であるため、用水路からの漏水が多い上、水田は多量の水を必要としました。

これらの地区は、粕川や揖斐川から用水を得ていましたがその量は十分ではなく常に深刻な水不足に悩まされてきました。特に、粕川から取水している地区では、粕川の水量の割に耕地面積が多く、江戸時代初頭から番水時刻を行なう厳しい取水管理がなされてきました。こうした用水が不足する状況は明治以降も変わらず、番水制も継承されてきました。水不足が解消されていくのは、第二次世界大戦下の食料増産が叫ばれる中で、ポンプによる地下水の汲み上げが始まったことに

よります。戦後には、町内の各地でポンプが普及しました。その後、ほ場整備に併せて用水路の改善が進み、昭和五〇年代には国営西濃用水かんがい事業も完成し、水不足問題は解決されました。

扇端部は水郷地帯

一方、扇状地の扇端部に位置する八幡地区(旧八幡村)では、水事情は一変します。扇状地を伏流してきた地下水が各所で湧き出し、屈曲する杭瀬川とその支流が幾筋も流れる同地区は、水郷地帯という呼称がふさわしい様相を呈していました。



杭瀬川の決壊危機 八幡小学校北・昭和34年)

杭瀬川は、池田山を水源として東斜

面の谷々の水を集め池田町の中央を南流し、大垣市高淵地内で牧田川へ合流しています。池田山の雨水の流出は速く、流れ出る土砂のために天井川となっていました。八幡村では蛇行して流れ、下流への水はけが悪いうえ、東川、中川などの支流に逆流して各所で氾濫しました。南部の市橋付近では一面が水につかることも珍しくなく、小学校へ通う児童が舟で送ってもらうこともあったといえます。

東川は、現在の粕ヶ原あたりの揖斐川を水源として、上田・下東野・六之井の東部を南下し、市橋の明渡付近で杭瀬川に合流していました。集中豪雨による出水の際、杭瀬川の水位が高いため、大量の水が東川へ逆流してしま

た。中川は湧の川とも呼ばれていました。湧は、水が地中から噴き出してくる状態を表す言葉で、扇状地をもぐってきた地下水が、上八幡の瑞泉寺の低地に湧き出したというところから名

づけられたようです。

● 湿田の稲作

杭瀬川とその支流が合流する八幡村の多くの地域は、普段から水はけが悪く、長雨や豪雨になると道も田も泥水の下になり、稲の穂が見えなくなるほど水につかっってしまうため、湿田の耕作を余儀なくされてきました。その農作業は実に重労働で、牛馬を使うこともままならず、腰近くまで泥田につかって人力で行われていました。



湿田で用いられた田舟



冠水した田

さらにやっかいなのはガマの湧出でした。ガマとは地下水が湧き出している泉のような状態のこと。田の一部にガマが噴き出すと、その冷たい湧水のために、夏でも田の水温が上がらず、稲は十分に育ちません。このような湿田を、ガマ田と呼んでいました。

● 杭瀬川上流改修の概要

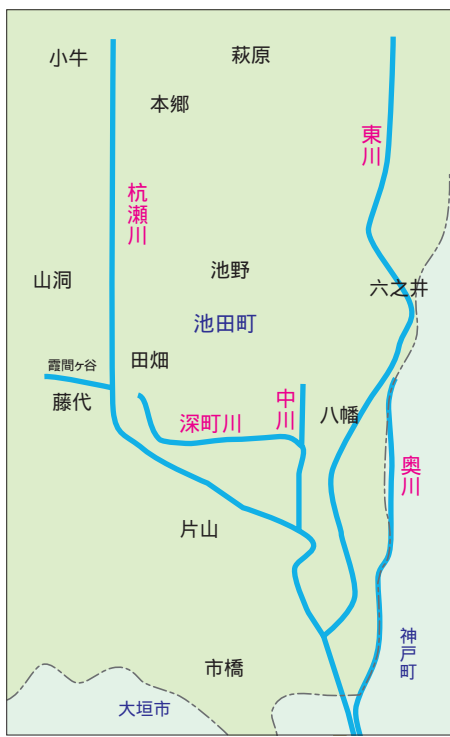
杭瀬川とその支川は、八幡村で悪水停滞や破堤という被害をもたらし、湿田での耕作を強いてきました。杭瀬川上流改修は、水害に苦しむ住民の積年



難工事だった杭瀬川改修 藤代・田畑地内)

の悲願でした。

木曾川上流改修(大正改修)の一環として牧田川・杭瀬川合流地点の改修(昭和八・二九)が進み、支川改修事業として杭瀬川改修(不破郡赤坂町・養老郡小畑村・現養老町間・昭和二二・二一)が完成すると、流末への排水に問題がなくなり、当地域での改修が現実のものとなってきました。



杭瀬川上流改修図

昭和二五年(一九五〇)八幡村は隣接町村の赤坂町(現大垣市)と南平野村(現神戸町)とで、「杭瀬川上流水害予防組合」を結成し、昭和二五年から五カ年の継続事業として、改修事業がスタートしました。事業費の負担は、国五〇%・県二五%・地元負担が二五%で、地元負担の内の半分を八幡村が負担しました。まず、大垣市内赤坂町池尻地内から上流に向けて、約三千mの新川を掘削して直線河川とし、その後、市橋地内にいたる区間の新川掘削に着手しました。

その後も杭瀬川の改修は続けられ、昭和三〇年からは、支川の奥川・中川の大改修が行われて無堤防に近かった杭瀬川本流・支流ともに、自動車が行可能な幅をもった堤防に生まれ変わりました。

昭和三五年には中川合流点(下八幡)から霞間ヶ谷(藤代)までの深町川改修事業にも着手し、昭和四〇年に完成

しました。昭和四三年からは、夫婦橋(片山南地内)より、上流の小牛地区(宮地)間の改修事業に着手、

河川改修の障害となる八幡地区の小学校、公民館、消防車庫、農協、民家などを移転して、河道を根本的に改修しました。

こうした事業により、河流が屈折し天井川であった杭瀬川の延長六千三百mにわたる大改修事業は昭和五四年に完了しました。

● 改修の効果

杭瀬川上流改修は、関係者にとって予想もしない難工事の連続でしたが、この抜本的な事業は、地域に大きな効果をもたらしました。蛇行していた杭瀬川がまっすぐになって淀んでいた水の流れも速くなり、いつも湛水していた地域で湛水が無くなりました。また、河川の河床が低くなったことで、周辺の地下水位が下がり湧水が減って湿地・ガマ田がなくなりました。乾田化によって農業の機械化が進み、収穫も飛躍的に増加しました。

● 自然を生かした環境整備

池田町一帯は、名古屋市の外郭都市としての市街化が急速に進みそれに伴い、河川景観、親水性の向上に配慮した環境整備推進に対する気運が高まってきました。住民が作成した環境整備の青図を行政サイドに提案するなど、環境に関する活動も活発化しています。

このような状況下、杭瀬川環境整備

計画が策定され、環境保全、地域の生活動線としての機能向上、河川景観、水辺レクリエーション等に配慮した川づくりを目指した計画が進められています。

平成六年には、町の中心部を流れる中川、東川の恵まれた自然環境を生かした公園の整備が進められ、平成八年中川水郷公園と東川公園が完成しました。中川周辺の清水池には、世界中でも西濃地方と滋賀県東部にしかない、極めて珍しい「ハリヨ」が生息しています。ハリヨはトゲウオ科の淡水魚で、この近辺は南限のひとつ。清水池はハリヨ公園として整備され、ハリヨが繁殖できる貴重な環境を保持しています。

明治・大正期に砂防工事が施された大津谷では、公園整備と水辺が一体となった砂防環境整備を平成七年からスタートし、平成一一年に完成しました。



大津谷公園



県指定天然記念物のハリヨ繁殖地（現在の清水池）

この大津谷には、古くから流路工が整備されていて、砂防の技術や歴史を学ぶ上で貴重な施設となっています。また桜の名所としても有名で、春ともなれば多くの人々が訪れます。

さらに平成一二年には緑の基本計画を策定しました。これは都市化によって自然が損なわれるのを防ぎ、豊かな自然を後世に残すことを目的としています。この計画により、人口の割に公園や緑地が少ない南部地域を対象として、公園づくり（池田南部公園整備事業）に着手。平成一八年の完成を予定しています。

参考文献

- 『池田町史』通史編 昭和五三年 池田町
- 『池田町』五十年のあゆみ
- 平成一七年 池田町
- 『ふるさとやわたの川と道』
- 平成一二年 池田町八幡公民館
- 『木曾三川治水百年のあゆみ』
- 平成七年 建設省国土交通省

「古墳の町」宣言・池田町

高度経済成長期の昭和三〇～四〇年代、地域開発に伴って池田山麓で大小無数の古墳が発見されました。昭和四二年（一九六七）から発掘調査が行われ、池田町は昭和四六年に「古墳の町」を宣言し、岐阜県指定史跡の願成寺西墳之越古墳群を横切る道路計画を変更するなど、古墳の保存に積極的に取り組んでいます。

池田山から東に流れ出る大津谷の右岸、見晴らしの良い扇状地上にある願成寺西墳之越古墳群は、面積約九haの中にこれまでに一一一基の古墳が確認されており、県下でも最大級の群集墳です。主に古墳時代後期の六世紀末以降に爆発的に造営されたもので、このような大規模な群集墳は周辺の一つや二つの集落によって造られたとは考えにくく、広い範囲の多くの集落がこの地を墓地として利用していたのでは

ないかと推察されています。

願成寺西墳之越古墳群は、調査の後、一般に公開されており、一号墳や五一号墳などでその状態が良くわかります。また、古墳時代中期の三六号墳や後期の九五号墳・一〇一号墳から出土した土師器・須恵器・鉄剣などの副葬品は、池田町中央公民館に常時展示されています。

そのほか、平成九年に、主要地方道岐阜 関ヶ原線の建設において発見された南高野古墳の一部を近くの公園グリーンパーク片山に移設しています。今年七月には、中八幡古墳出土品が池田町文化財に指定されました。中八幡古墳は五世紀に築造された前方後円墳で、その出土品には日本における初期馬具をはじめとして朝鮮半島との関係をつかかわせる豊富な遺物が含まれています。



36号墳の竪穴式石椁



1号墳の横穴式石室



95号墳出土遺物

天空へ駆け上がる、

祭囃子の音色。



池田山(池田の森)

実りの時を迎えた黄金田は秋風に揺れ、暮れなすむ夕日はすすき野を茜色に染め上げる。今はすっかり穏やかな山も川も、牙をむき、暴れまわったことがあるという。池田町に伝わる祭礼はそんな歴史の語り部です。天空へ、そして次代へ。祭囃子の音色は、絶えることがありません。

町のシンボル、池田山

名神高速道路大垣ICから国道を北上すると、大垣と池田町をまたぐように、でーんと腰を据える金生山がみえてきます。金生山を過ぎると次に見えてくるのが、池田山です。



池田温泉、本館露天風呂の一つ

青空の下、美しい

稜線を際立たせる池田山は、遊歩道が整備され、ハンンググライダーのメッカとしても有名なところ。中腹では小僧ヶ滝が清々しい姿を見せて、山麓では池田温泉が、くつろぎの時間をプレゼントしてくれます。

この池田山は、杭瀬川の水源として人々に恵みをもたら

し、生い茂る樹木は、燃料の薪や普請材に利用されてきました。豊かな自然の営みも、ある時は牙をむき、土石流を引き起こすことも。

そんな自然への畏怖と感謝を込めて、池田町の祭りは生まれたのでしよう。祭りはいわば、歴史の語り部です。池田町に伝わる祭りを訪ねて、旅してみましよう。

桜の名所・霞間ヶ溪

国の名勝・天然記念物・霞間ヶ溪は池田山が生み出した桜の名所です。花の咲く様子を遠くから見ると、霞がかかったように見えることから、いつしか「霞間ヶ溪」と呼ばれるようになったといえます。

春になれば桜が咲き競つこの谷も、歴史の物語に彩られています。池田山で一、二を争う深さのこの谷は、慶安三年(一六五〇)激しい山崩れを起こし、以後もたびたび崩れることがありました。

江戸時代、そんな土砂災害を防ぎ山林保護のための鎌留めを申し合わせ、草木の伐採を禁止しました。こうして治山への取り組みは功を奏し、谷一面

を雑木とともに山桜が覆いつくすようになりました。明治一四年(一八八一)岐阜県の小崎県令はこの景勝地の保護・紹介に尽力しますが、明治二九年(一八九六)の豪雨によって、山は荒れ桜も壊滅状態に。この時、堤防修築とともに数千本の山桜を植樹したものが、現在の母体です。

天を切り裂く稲妻、怒涛のよつに荒れ狂つ泥の川、実りの時を迎えた田も畑も、そして家さえも瞬時に奪い去る自然の猛威を前に、人々は鎌留めという方法を選ぶことしか許されなかったのです。

そんな人々の苦しみも涙も知ってか知らずか、霞間ヶ溪の桜は大地にしっかりと根を下ろしていました。

片山八幡神社市やまの鯰押さえ

霞間ヶ溪の桜が咲き誇る頃、片山の八幡神社では祭囃子が響きわたります。境内にしつらえた屋形の高欄では、

老人、大鯰、獅子の三体の人形が、鯰押さえの演目を、白髪のお老人が赤い頭巾をかぶり、瓢箪を両手で振りかざし、暴

れ狂つ大鯰を押さえようと必死です。これは約三百年前の大干ばつがモチーフとなっています。



片山八幡神社市やま

干ばつに苦しむ村人が、雨乞い祈願を行ったところ、未明から激しい雷雨となり、この雨で満水した片山深町の田面を、六尺もある大鯰が泳ぎあがってきたそうです。村人は、これは吉兆で神のお使いであると大鯰を神前に供え、笛・太鼓に合わせて神楽と鯰押さえを奉納しました。

これが、毎年四月第二日曜日片山八幡神社祭礼に奉納される、片山八幡神社市やまの由来です。この、鯰押さえの演目は、大垣祭りや綾野祭りなど、干ばつに苦しんだ杭瀬川流域に多く見られます。

悪魔被いを願つ、白鳥神楽

湯水にまつわる祭りは、白鳥地区にも伝えられています。



池田山からの景色

季節を彩るイベント

みの池田ふるさとまつり

10月第1日曜日

昭和51年、合併20年を過ぎた池田町では、「みの池田ふるさと祭り」の開催を決定しました。池田町を遠く離れている人々も、ふるさとへ帰り歴史や伝統にふれてもらおうという目的もありました。明和義民供養祭や武将供養祭、郷土芸能披露に各種バザーなど、全町が祭り一色に盛り上がります。



ヤングフェスティバル

9月中旬

池田町青年のつどい協議会を中心に、池田町総合体育館で行われるイベントです。西濃有数の規模を誇る「るんるんフリーマーケット」やバザーの「喰う喰うモール」、バンド演奏など、若者を中心とした熱いイベントが繰り広げられます。



池田サクラまつり

3月下旬～4月中旬

50年の歴史を誇るこの祭りでは、町内外の保育園児から中学生までを対象とした写生大会や郷土芸能披露、特産品即売会などの多彩なイベントが、霧間ヶ渓や大津谷の数千本の桜の木の下で行われます。



交通のご案内

名古屋方面からお車をご利用の方

名古屋市 → 国道22号・国道21号・国道417号 (約100分)

名古屋方面から公共交通機関をご利用の方

名古屋駅 → JR東海道本線 → 大垣駅 → 近鉄養老線 → 池野駅 (約40分)

お問い合わせ

池田町役場

〒503-2492 岐阜県揖斐郡池田町六之井1468-1
TEL 0585-45-3111 <http://www.town.ikeda.gifu.jp/>

享和元年(一八〇一)白髭神社(白鳥神社の前身)境内から泉が湧き出し、神楽の面が現れました。驚いた人々は、神さまからの授かり物として、大切に奉納しました。時は下り、安政三年(一八五〇)年の夏、一帯が大干ばつに見舞われたとき、村役の権九郎の提案で泉から出た神楽面を着けて皆で踊ったところ、明け方近くから一昼夜続きの大雨となりました。それ以来、神社のお祭りに獅子舞を奉納するよつになり、その神楽を権九郎神楽と呼ぶよつになりました。



白鳥神楽

一五〇日に奉納されます。胸に太鼓を抱き、孔雀のような羽根を風にはためかせながら、男たちは大地に足を踏みしめて踊ります。般若畑に伝わる雨乞い踊りです。六百年ほど昔、池田山麓一帯が大干ばつになったとき、農民が集まり、神さまに雨の恵みを願うため踊ったのが始まりといわれています。八人の踊り手が、笛や鉦、法螺貝に合わせ踊るもので、背中には二mあまりもあるシナイを背負っています。シナイは、色鮮やかな五色の紙で飾られた竹の飾り。第二次世界大戦の前後の五〇年ほど中断されました。



古式般若おどり

が、昭和五十一年、みの池田ふるさと祭り

を機に復活。現在では同ふるさと祭りほか、各地のイベントなどで踊られています。

壮麗な市山からくり花火

夜空を滝のように流れる仕掛け花火とからくり人形の競演。この壮麗な祭りが、市山からくり花火です。祭りは、境内に設置された置山の上で、「やっこかこめけ」「ゆとり市」おやま市(三体の操り人形がお囃子にあわせて、演技をします。その合の手を縫うように間夜にくりひろげられる様々な仕掛け花火は、まさに圧巻です。池田の人々が何百年にもわたって伝承した伝統芸能で、毎年九月一五日、下東野の神明神社で行われます。その昔、境内の樹木を一枝切れば、小判三両の罰則を定めていた神明神社で

すが、百余年前の暴風雨で見事な樹木も、すっかり姿を消したそうです。また、粕川の大洪水により社殿が流失したこともあったとか。そんな災害にも負けず、今も伝承される技法の数々は、人々のこの地にかける心意気を表しているでしょう。

池田町に伝承される祭りは、水害や干ばつに由来するものがほとんどです。眼前に川や山を控えているため、出水に悩まされ、水がほしい時には、川床がむき出しになる…。秋晴れの日に、輝く山も川も今ではすっかり穏やかですが、そんな苦闘の日々を忘れないために、そして昔の人々への感謝を込めて、祭りの音色は、天空へ駆け上がっていきます。



市山からくり花火

木曾三川の
河道変遷
第二編

長良川・揖斐川の

河道変化と郡境

長良川・揖斐川は、山地を抜けて平野部に出ると扇状地を形成しその流路を頻りに変えてきました。河道変更は有史以降も繰り返され、古代に定められた郡界にその足跡を見ることが出来ます。今回は郡界との関係を中心に長良川・揖斐川の河道変遷を見ていきます。

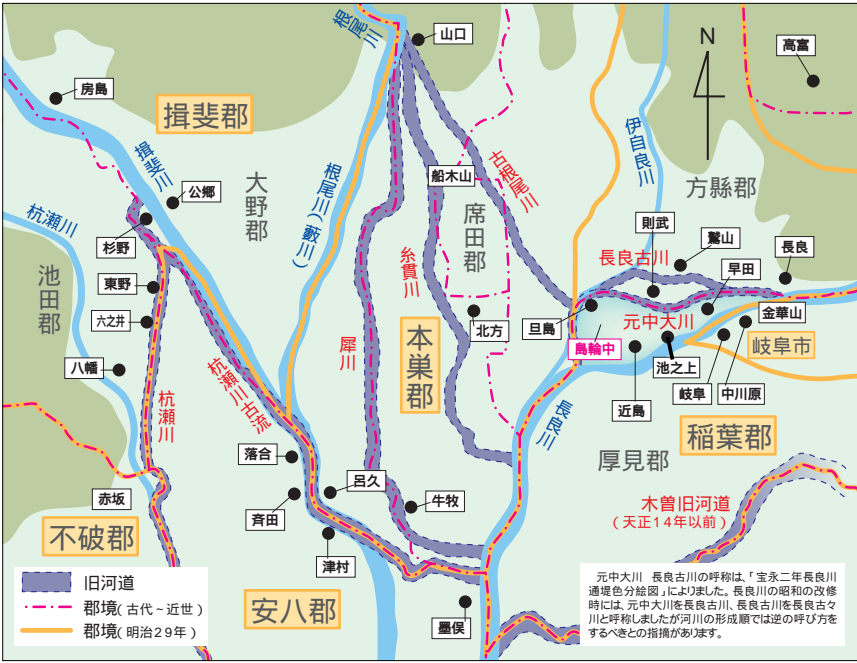
古代・律令体制の行政区分では、国の下に郡が置かれました。大化の改新

の時に成立した評が、大宝律令（七〇一年制定）において郡となり郡司が管轄し、律令制度を支える行政機関として班田や徴税に重要な役割を果たしました。

その境界の多くが特に平野部においては河川によって分けられていました。したがって、郡界は、それが制定された古代の河道を想定する手掛かりとなっています。また、河道の変化によって新たな郡が創設されることもありました。

川は早田・池之上・東島・江口などの諸村を貫流し、早田村では東伝寺地区が切り離されました。しかし、この河川は直ちに長良川本流といえるような大河川として出現したのではないようです。

長良川を行き交う荷舟から役銀を徴収する長良川役所ははじめ早田村馬場（元中大川・長良川の分流地点）にありましたが、寛永一三年（一六三六）長良川左岸の中川原に移っています。



郡上市高鷲の大日ヶ岳に端を発した長良川は、美濃の山間部を流れ、岐阜市金華山の麓で濃尾平野に出ます。平野部に出た長良川は伊自良川の合流点付近までの約5kmにわたり岐阜扇状地を形成しました。人の手が加

岐阜扇状地での長良川

現河道への変更

元中大川：長良川の昭和の改修時に長良古川と呼ばれた川筋

現河道への変更

天文三年（一五三四）、大洪水があり、岐阜市早田で用水の取水口を破壊して新河道（現長良川）が出現しました。新



長良川(岐阜市)

この理由を岐阜市史では、『現在の流路に近い南の川は（中略）近世初頭には現在と比較にならぬ程小さな川で、長良川の本流はもつと北を流れていたよつである。長良川役所がはじめ早田村馬場にあつたのも、そつした長良川の流路に照心して設けられたものである。それが寛永期に川瀬が変わり中川原の地に移されたといつことは、岐阜町よりの井川が以前と比べて大きな流れになつてきたこと……』としていませう。長良川は序々に本流に変わつていつたよつです。

また、江戸時代初頭、尾張藩領早田村・池之上村は長良川によつて岐阜町と隔てられていたにもかかわらず岐阜町の附村となつており、早田村などは、村方と町方に分けて支配が行なわれる程岐阜町の町人と結びついていました。これは長良川本流と呼べるよつな大河川によつて分かれていたとは考えにくい関係です。

しかしその後、長良川が大河川となると、早田村・池之上村は、長良川と元中大川にはさまれた近島村や旦島村などとともに島輪中を形成していきませう。早田村・池之上村は明治二年（一八八九）に成立した岐阜市には加わらず、明治三〇年（一八九七）島輪中一〇ヶ村で島村を形成しました。岐阜町との結びつきより、輪中内での連帯の方が強くなつていたのでしよつ。島村が岐阜市と合併するのは昭和になつてか

らのこつです。

かつての揖斐川本流・杭瀬川

白山山地の冠山を源流とし、西美濃地方の山間部をぬつて南流する揖斐川は、揖斐川町で濃尾平野に出た後、その河道をしばしば変えています。現在の揖斐川の表記がなされたのは明治になつてからで、それ以前は伊尾川と称されており、上流山間部では久瀬川とも呼ばれていました。

古代においては、杭瀬川と呼ばれており、その流路は濃尾平野に出た後すぐ南流し現在の杭瀬川筋を流れたとされています。正確には、池田町杉野（現在の三町大橋付近）で南向きに流れ、池田町東野・六之井・八幡の東を通り、さらに大垣市赤坂の東を通つて、これから下流はほぼ現在の杭瀬川筋を流下していました。池田町域では、現在



杭瀬川(大垣市)

の杭瀬川ではなく池田町の東境を流れており、これは安八郡と池田郡の郡界となつていたことと一致します。

享禄三年の大洪水

揖斐川本流の杭瀬川筋から現在の河道への変動は、享禄三年（一五三〇）の大洪水によつてもたらされました。それまで池田町杉野で南に折れていた流れが東南へ向きを変え、斎田と呂久の間を通つて津布良から福東・今尾方面に下るよつになり、ほぼ現況に近い流路となりました。

この変動により杭瀬川は揖斐川から切り離され、池田山の溪水と扇状地の扇端湧水を水源とする河川となりました。

当時の池田町杉野は、大野郡公郷村に属し赤池と称した集落でしたが、新河道が村を割つて流れたため本村と切り離されました。その後、集落は分立し杉野村と称しました。村は独立しましたが、郡界は特に変更されなかつたため、揖斐川右岸にありながら杉野村は大野郡に属していました。近世までは所属する郡がどこであつても不都合はありませんでしたが、明治になつて郡政が復活すると事情が変わりました。明治一七年（一八八四）大野郡である杉野村は、揖斐川左岸の公郷・領家・大衣斐・小衣斐の各村と聯合戸長所轄区域が設定されました。しかし、大河川をはさんだこの区域設定は地域の実

態にそぐわず、明治三〇年、杉野村は池野村・六之井村などと合併し池田村となりました。

杭瀬川以前の揖斐川本流

享禄三年の時点では杭瀬川が本流だつた揖斐川ですが、さらに遡ると安八郡と大野郡の郡界となつていた河川が存在しこちらが本流であつたといわれています。杭瀬川古流と呼ばれるこの川は、呂久・津村を過ぎて東に向かい墨俣の北で長良川に合流していたよつです。

この川筋について、『墨俣町史』に、『揖斐川はその初め斉田・落合・呂久の西を流れ、津村の北を流れて、結・墨俣の北辺を流れ、犀川と合流墨俣北東部にて長良に合流したが、享禄三年より現在の所を流れるに至る。』という記述があります。これは、長良川に注ぐ川筋（町史では、揖斐川としています）が、この時点では杭瀬川が揖斐川本流ですから、かつての杭瀬川古流の川筋を指すと思われませう（が存在していたこと、また、その河筋が享禄三年の洪水によつて出来た新川（現揖斐川）にとつて代わられたことを意味していませう）。

杭瀬川がいつ頃揖斐川本流になつたか定かではありませんが、揖斐川が洪水によつて杭瀬川筋を流下するよつになり安八郡を二分したため、承和四年（八三七）池田郡が分立したとする説があり、これに従えば承和四年の直近



根尾川(山口)

ということになります。

河道変更を繰り返した根尾川

越美山脈に端を発する根尾川は、本巢市山口で平野部に流れ出て、山口を扇頂、本巢市下真桑・北方町北方付近を扇頂とする扇状地を形成してきました。また、洪水の度に大量の土砂を運んできて扇頂部に堆積させるため、もとの流路がさえぎられ河道の変更、分流を繰り返してきました。

古くは、扇状地の東を南流して長良川に合流していたと言われており、これを古根尾川と呼んでいます。また、本巢郡と大野郡が犀川によって分けられていることから、郡が制定された当時は犀川が根尾川本流であつたといえます。

その後、根尾川本流は、本巢市中央部を南流し北方町を経て瑞穂市生津

で長良川に合流する糸貫川筋に移りました。このように現在の根尾川筋(藪川)が出現するまでの根尾川本流は一貫して長良川の支流でした。

本流が糸貫川筋に移った時期等はわかっていませんが、席田郡明治二九年本巢郡に編入)の成立と根尾川の河道変更を関係つけている説があります。席田郡は、船木山の南方、糸貫川の東に位置し、『続日本紀』靈龜元年(七一五)秋七月二十七日の条に、「尾張国人が新羅人七四家をひきいて席田郡を創建した」とあります。『糸貫町史』は、異民族の移入は、荒廢地を開拓することが目的だつたとした上で、「大化前代、この地域は古墳に実証されるように豊かであつた。とすれば大川が洪水によつて荒廢をもたらしたと考えねばなるまい。乃ち大化改新後、糸貫川が洪水により新しく川筋をひらいたとしか考えられない。即ち根尾川が上ノ保山(船木山の別称)の西へ川筋を変えたのである。」と記述しています。この説に従うならば、根尾川本流は席田郡創建以前のそれ程遠くない時期に糸貫川に移つたこととなります。

現河道・藪川の出現

揖斐川本川の河道を変えた享禄三年の洪水は、根尾川の河道も大きく変えました。それまで糸貫川を本流としていた流れは、洪水によって、山口の西方、藪地内を突き抜けて西南に向かい、

揖斐川に合流する現在の流路・藪川(現根尾川)を生じました。この新川は、それ以前は真桑方面の用水路で、取水口を破つて流れたと言ひ伝えられていますが、確かなことはわかっていません。

流量が減つて本流を藪川に譲つたものの、糸貫川は依然その流路を保ち長良川に注いでいましたので、根尾川は揖斐川・長良川両川の支流となりました。この状態は、昭和二五年に糸貫川の分派口が締め切られるまで続きました。

このほか享禄三年の洪水では、かつて根尾川本流であつた支流・犀川が、その流入口が塞がつて本川から切り離されています。

新たに郡界となつた藪川

藪川の出現で、大野郡はその平野部が分断される形になりました。律令制が崩壊した後の郡は、行政上の実効的な役割が失われており地理的区分でしかありませんでしたから、これに伴う不都合などは生じませんでした。しかし、時を経た明治一〇年(一八七八)の郡区町村編制法によつて行政区画としての郡が復活しました。郡に実効的な役割が課せられたことにより、明治二九年、藪川右岸の大野郡、揖斐町他四三村)は池田郡と合併して揖斐郡となり、左岸(一八村)は本巢郡に編入されることとなりました。これによって、

『続日本紀』に初見を見る由緒ある大野郡・池田郡の名称は消滅しました。

河道変更と輪中の形成

享禄三年の大洪水によって、揖斐川は杭瀬川筋を離れ東南に流れる新しい河道となりました。これに、根尾川本流となつた新川・藪川が大野郡座倉で合流し大野郡・安八郡を南流する大河川が出現、以後、流域に洪水をもたらした大きな脅威となりました。

新しい揖斐川と長良川にはさまれる形となつた地域では水害の脅威が増大し、輪中が形成される下地となりました。大野郡南部の七崎・古橋、本巢郡の牛牧、安八郡では墨俣などの輪中がそれにあたります。

このように、河道の変更を繰り返してきた長良川・揖斐川も、近世には室厩治水に代表される大規模な治水事業や輪中の発達によつて人工的に河道が固定されていきました。

参考引用文献

- 『木曾三川流域誌』
- 平成四年 建設省中部地方建設局
- 『揖斐川町史』 揖斐川町
- 『岐阜市史』 昭和五六年 岐阜市
- 『墨俣町史』 墨俣町
- 『岐阜県治水史』 昭和二八年 岐阜県
- 『糸貫町史』 糸貫町
- 『池田町史』 昭和五三年 池田町
- 『木曾三川治水百年のあゆみ』
- 平成七年 建設省国土交通省



『水屋・水塚・段藏』

日本各地の防水建築

花園大学名誉教授 文学博士 伊藤 安男 氏



伊藤 安男 氏

立命館大学文学部地理学科卒業。花園大学名誉教授
文学博士 岐阜地理学会会長、岐阜県古地図文化研究
会会長。主なる著書『輪中』『ふるさとの宝物、輪中』『写
真集 輪中』『変容する輪中』『空から見た名古屋・岐阜』『岐
阜県地理あるき』『東山道の景観と変貌』『長良川をある
く』『安八町、9.12豪雨災害誌』『治水思想の風土』地図で
読む岐阜』『岐阜県地理地名事典』など多数。
現在大垣市在住

水害時の避難場所や米倉或いは重要な什器類を安全に収納するため、同一屋敷内に高く土盛、石積された建築物は、日本各地の洪水多発の河川流域にその分布がみられる図(1)。それらを代表するものが木曽三川流域の水屋建築である。

然としないまま、タイトルに防水建築としている。
日本国語大辞典(小学館刊)によれば、水防は、洪水や高潮などに際して水害を警戒、防御し、またその被害を少なくすることとある。防水は、出水をふせぐこと、水の流入をふせぐこと、水

水屋 以下、水屋建築を水屋と呼称すは輪中とともに、学校教育においても取扱われて広く人口に膾炙している。しかし水屋以外にも利根川中流部の「水塚」、淀川中流部の「段藏」などの分布が研究報告されている。
これらを総称して如何なる用語で呼称すべきか、かつて筆者は防水建築として研究発表したことがある。この発表について、防水建築より水防建築の方が適切であるという指摘をつけた。この用語について現在も筆者は釈

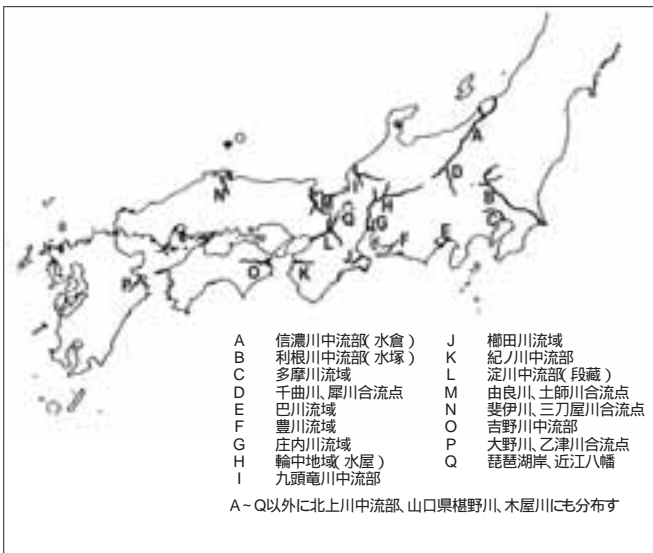


図1) 日本各地の防水建築の分布(伊藤安男原図)

語源的解釈は別として、試行錯誤の上、水害時の情景から前者はアクティブなもの、後者はパッシブティ(受動的)なものと思考して防水建築としている。
このような防水建築は、図(1)にみられるように日本各地の洪水多発河川の流域に例外なく分布するといっても過言ではない。それらのなかでもその分布棟数と密度からみて代表的なものが、前述の水屋、水塚、段藏さらに信濃川の、水倉などがあげられる。但し、水倉については、建築史の「高名な学者が、命名されたもので地元ではまったく定着した用語ではなく、たんに倉と呼ばれているにすぎない。従ってここでは三者を中心に述べてみたい。



写真(1) 文化的景観重要地域に選定された大垣市釜箇地区の水屋群(部分)
平成17年 伊藤安男 撮影

平成一五年(二〇〇三)に文化財保護法が改正され、新しく「文化的景観」が位置づけられた。その一環として大垣輪中南部の釜箇地区(大垣市釜箇町)の水屋群が、固有の風土的特色を顕著に示すものとして文化庁より「文化的景観重要地域 田園と輪中集落との複合景観」に選定された。(写真(1))

しかし、水屋をはじめ、水塚、段藏などはたんなる文化的景観ではなく、洪水への対応として生じたものだけに、水害の悲惨さを後世に伝える語的存在である。いつならばその地域住民の防災意識を高めるための、防災景観であり、現在も機能していることを強調しておきたい。

いうならば洪水と人間の相剋の歴史を端的に象徴するのが、水屋、水塚、段藏などの防水建築である。防水建築の水屋などが再認識されつつある一方、国土交通省では新しい治水工法として、連続堤方式やダム方式以外に江戸期の輪中堤方式や遊水地(治水緑地)が見直され、すでに三重県紀宝町では「水防災対策特定河川事業」として、同町の相野谷川流域で平成二二年(二〇〇〇)以降に囲堤による工法が施工されている。

さらに来年度(二〇〇七)より洪水氾濫地域減災対策制度(仮称)が創設され、輪中堤方式以外に二線堤方式(控堤)が施工されて住宅地を洪水から防御する施策が検討されている。

水屋・水塚・段藏にみる共通点

地形的環境

和辻哲郎はその風土論のなかで、家屋の様式は家を作る仕方の固定したものであると言われる。その仕方は風土とのかかわりなしに成立するものではない、と述べている。

この三者の防水建築の分布を調査すると、ともに洪水常襲地帯であることはいうまでもないが、その洪水多発となる地形的基礎として、ともに地殻運動の造盆地運動による恒常的沈降地帯である共通点をもっている。そのためその分布地域において大小の河川が合流する。

具体的には水屋地域では木曾川、長良川、揖斐川が合流し、三川の間を小中の河川が網流する。水塚分布地域は利根川、渡良瀬川、恩川、巴波川が合流して赤麻沼を形成している。段藏地域は淀川、桂川、木津川、宇治川が合流し巨椋池に流入していた。

その上、これら造盆地運動地帯の近傍にはそれぞれ活断層がみられる。例えば水屋分布地域には養老断層(養老起震断層)が、水塚地域には元荒川構造線(深谷起震断層)、段藏地域には有馬高槻構造線(六甲起震断層)が存在することであり、この地域では恒常的沈降以外に地震時には急激な地盤沈降が起る。水屋地域では、宝永四年(一七〇七)の地震時には本阿弥輪中(海津市本阿弥)で約三〇cmの沈降が、また明治二四年(一八九一)の濃尾震災時には揖斐川左岸の瑞穂市菓南町では三〇八cmの沈降量が確認されている。

したがってこれらの分布地帯では、低湿な土地がより低湿な土地となるラジカルな要因が具備されているので

ある。

なおこれらの地域は洪水常襲地帯のため、地域住民は江戸期より自普請にて囲堤を築立して洪水対策としてきた。この囲堤の名称については木曾三川流域の輪中が広く知られているが、その他に流域ではそれぞれ独自の名称をもって呼称されており、輪中なる名称は用いられていない。

分布変化と消失過程

近年の治水事業の進行により水害は大きく減少したため、これら防水建築は過去の遺物化しつつあった。それとともにその所有者であった富裕農民であった地主階級が、戦後の農地解放により、維持管理が困難となったこと、或いは所有者の水意識などが相乗して取り壊されて多くが消失した。



写真(2) 水神を祀る水塚(群馬県板倉町)平成16年 伊藤安男 撮影

戦前には

何棟ほど分布していたのか、その資料は極めて乏しい。しかし幸い大垣輪中のなかの小輪中、禾ノ森と西中之江輪中の昭和一〇年(一九三五)の水屋調査のデータがあったため、それと現在とを比較したのが表(1)である。それによると両輪中で昭和一〇年に六八棟あったものが昭和六二年には三三棟と

調査区域	水屋分布数 (昭和10年)	戸数 (昭和10年)	戸数に対する 水屋(%)	水屋分布数 (昭和62年)	戸数 (昭和62年)	戸数に対する 水屋(%)
高橋(鉈田町) 東高橋町	3	33	9%	3	135	2%
長 沢 長 沢 町	11	52	21%	5	156	3%
禾ノ森 禾ノ森町	21	69	31%	10	212	5%
東 前 東 前 町	9	40	23%	4	103	4%
犬ヶ測 犬ヶ測町	5	13	38%	3	88	3%
福田新田 大井町	6	29	21%	3	235	1%
築 捨 築 捨 町	13	103	6%	4	318	1%

表(1) 水屋分布の変遷(禾ノ森輪中・西中之江輪中 大垣市) (昭和10年の調査は秋山恒士氏、昭和62年は輪中研究会による)

なっており、半減している。

この傾向は、文化庁より文化的景観重要地域に選定された釜笛地区の悉皆調査の結果にもみられ、かつて一五棟あったものが現在は一〇棟に減っている。図(2)参照。この減少傾向は、昭和五一年(一九七六)に、安八町にて長良川本堤が破壊して大水害となつて以降に水屋の必要性が認識され、この傾向に歯止めが一時的ながらかかった。それを示するのが表(2)アンケート結果である。

水塚地域でも同様に群馬県邑楽郡板倉町では、昭和三五年(一九六〇)に四九二棟の分布が、昭和五四年には三四

三棟に、平成二十三年(二〇一一年)には一五三棟に減少している。表(3)、写真(2)

淀川流域の段藏は、左岸では、寝屋川付近、右岸では高槻市の芥川、安威川流域に多く分布しており、それぞれ「かいふち」「まわし」と称される囲堤が近年までみられた。寝屋川市の神田地区では昭和三十六年(一九六一)に二八棟の段藏が、平成七年(一九九五)には一〇棟に減少している。写真(3)

屋敷内の位置関係

防水建築の定義として、同一屋敷内に独立した建築物があることとされている。その場合に主屋からみた建築物の位置が問題となるが、図(3)、(4)にみられるように三者とも北西部に多くみられる。例えば水屋の場合、北西部に三



写真(3) 段藏(高槻市唐崎)昭和48年 伊藤安男 撮影

三三三%、西部に三三.一%となり、五六.四%が北西から西部に立地している。段藏は約半分の四五〇%、水塚は三六.一%が北西に、一六.五%が西部に建てられている。

これらが北西部に多く立地する要因として考えられるのは、冬の寒冷季節節風を防ぐ防風林的機能。次に主屋の日照を防げないこと、さらに家相からみて鬼門にあたらぬように乾の方角は吉方位とされていることなどがあげられる。

以上わが国の代表的な防水建築について簡述してきたが、これらは過去の遺物ではなく現在も機能しており、水害の教訓を後世に伝承する防災景観であることを付言して結語としたい。

参考文献・注

伊藤安男「日本各地の低湿地集落 防水建築よりのアプローチ」『日本地理学会予稿集(八)昭和五〇年』

和辻哲郎「風土 人間学的考察」一八頁 岩波書店 昭和一〇年

産業技術総合研究所地質調査総合センター「全国主要断層活動確率地図」同センター刊 平成一七年

多田文男 井関弘太郎「濃尾盆地と傾動地塊運動」八一頁 総理府資源調査会 昭和三〇年

伊藤安男編著「変容する輪中」三四頁 古今書院 平成八年

板倉町「水防建築水塚調査報告書」二四頁 群馬県板倉町教育委員会 平成一六年

内田秀雄 中井絵「段藏」人文地理一六ノ三 昭和三九年。

「段藏」の分布調査については山下洋治君の花園大学卒業論文による。

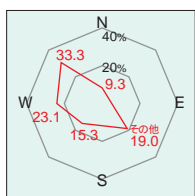


図3) 主屋からみた「水屋」の位置(大垣輪中)

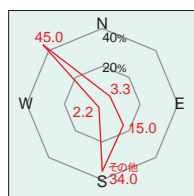


図4) 主屋からみた「段藏」の位置(寝屋川市)

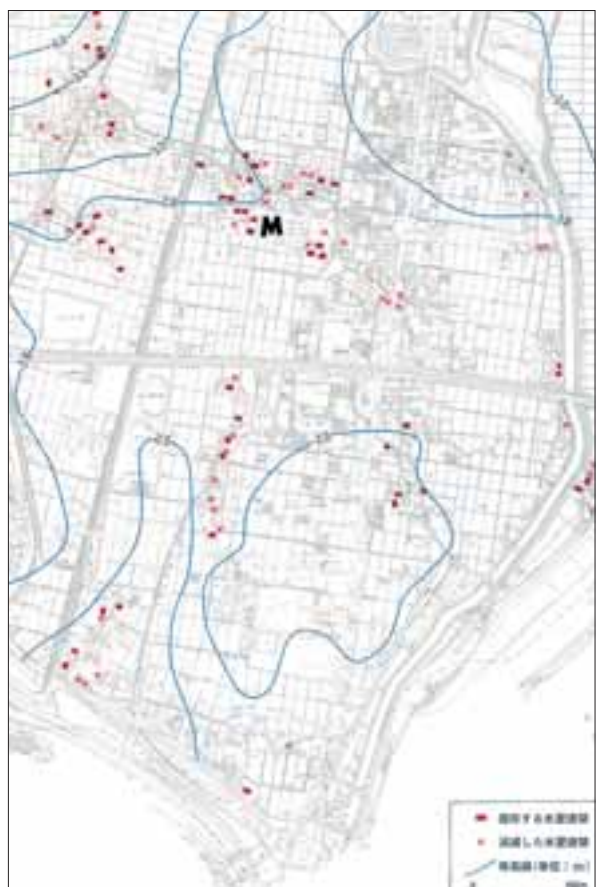


図2) 大垣輪中南部の水屋分布図(Mが釜釜地区)(大垣市遺跡詳細分布調査報告書、平成九年)

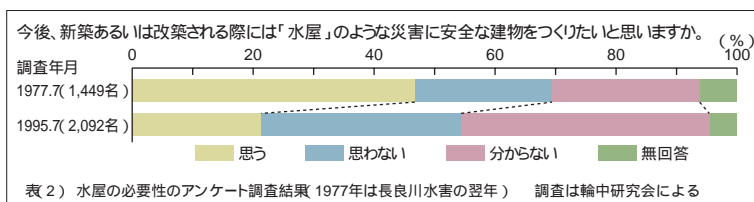


表2) 水屋の必要性のアンケート調査結果 1977年は長良川水害の翌年 調査は輪中研究会による

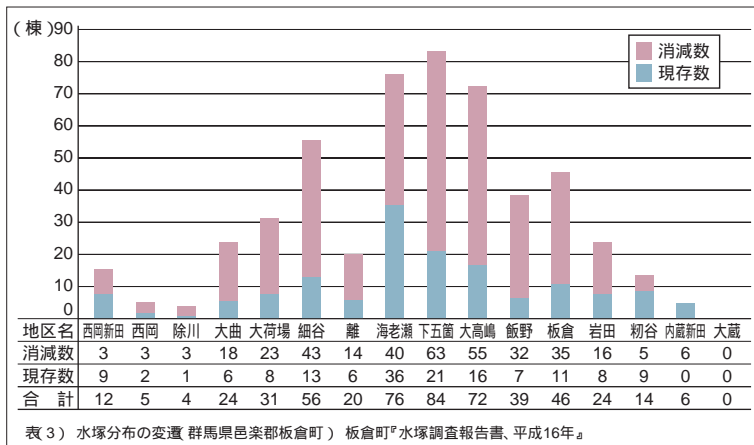


表3) 水塚分布の変遷 群馬県邑楽郡板倉町) 板倉町「水塚調査報告書、平成16年」

民話の小箱

白竜退治 池田町

池田町の山洞区に伝わるお話です。

平安時代、山洞村のあるところは池田荘小池村でした。

領主は野原常依といって、

母は倭藤太の名で知られた藤原秀郷の娘でした。

藤太の近江三上山の百足退治の伝説は有名で、

平将門の乱を平定して功績を挙げ、

源氏・平家に並ぶ武門の棟梁として、

多くの家系を輩出しました。

この頃の小池村には大きな池があり、

池を見下ろすように池田山がそびえていました。

ところが、その池には白竜が住んでおり、

村里へ現われては荒らしまわるので、

農民たちは田畑を捨て、村には住む人もいなくなりました。

思いあまつた野原常依は倭藤太に頼み込み、

白竜を退治することにしました。

小池村にやってきた藤太は、

山の上に日の丸を描いた六本骨の扇を立て、

弓に白羽の矢をつがえて放つと、矢は池の中に落ちました。

この矢の鋭さに恐れをなした白竜は、

池の堤を破って逃げ出しました。

白竜の巨体が体当たりした堤防は無残に崩れ落ち、

空を切り裂く激しい雷雨に山は牙を剥き、

怒涛のよつな泥の波は、

池も谷も押しつぶしてしまいました。

この土砂は平地を作り、新しい村が誕生しました。

これが今の山洞村です。

野原常依はその村に城を築き、

いつまでも栄えたといいます。



この頃から村の南を流れていた

喜助谷は鎌ヶ谷と改められ、

時代は下り、鎌ヶ谷一面を

霞のように桜が埋めつくすことから

霞間ヶ溪と呼ばれるようになりました。

池田荘の史料に山洞の名は登場しても、

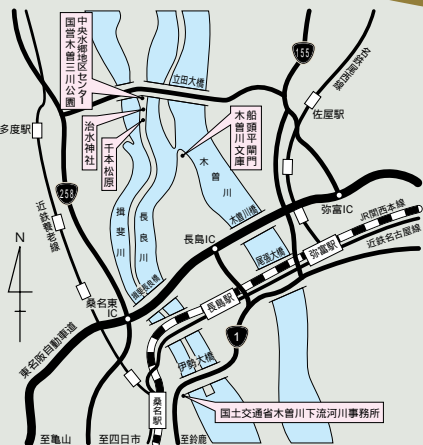
倭藤太の名を見つけないことができません。

洪水に苦しむ人々が、平安時代の英雄・倭藤太だったら

池の主を退治してくれるという願いが、

こんな民話を生み出したのでしょうか。

木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前8時30分～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日(月曜日が祝祭日の時は翌日)・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平開門管理所・
木曾川文庫

〒496-0947 愛知県

愛西市立田町福原

TEL(0567)24-6233



編集後記

弊誌では、読者のみなさんの声で構成するコーナーを企画しています。身近でおこった出来事、地域の情報などをお知らせ下さい。

今号の編集にあたって、岐阜県池田町の皆様及び、伊藤安男氏にご協力いただきありがとうございます。ございました。お礼申し上げます。

今回は、岐阜県山県市を特集します。ご期待ください。

宛先「KISSO 編集 FAX(0567)24-5166

木曾川文庫ホームページ
<http://www.kisogawa-bunko.cbr.mlit.go.jp>

表紙写真 上左:桜の名所・霞間ヶ溪 上右:願成寺西墳之越古墳群(1号墳) 下:揖斐川(三町大橋より)